

適応

1. マイマイカブリ

5cm以上もある黒いひょうたんのような虫が細長い脚でカサカサと通り過ぎる時、捕まえてはいけません。臭い液体を尻から噴射し、皮膚に付くと炎症を起こすからです。一度体験した子どもは、二度と手を出しません。本来は夜行性ですが、昼間でも出会います。

カブトムシのように前翅が硬くなっている鞘翅類^{しょうしるい}という仲間ですが、左右の前翅は合体して開くことができず、後翅も退化していますので飛ぶことができません。したがって、地上を徘徊して餌を探しているものを見ることがになります。日本固有種ですが、移動力が弱く、色彩等に地域差が生じるため、コレクターに人気の昆虫です。打吹山には一般的な地味なものが生息しています。

頭にかぶっているのか、かぶりついているのかわかりませんが、名称の通り、もっぱらマイマイ(カタツムリ)を餌とする昆虫です。殻の中まで頭を入れる必要があるため頭胸部が細くなり、大顎が発達しています。幼虫も餌にするのはマイマイだけです。打吹山でカタツムリの殻だけを見つけた時は、マイマイカブリの犠牲者と考えてよいと思います。マイマイの柔らかい部分に噛み付くと、消化液を注入して溶けた肉を食べます。そのため噛み付いたままでいることになり、上の写真のような出会いが生じます。昆虫やクモに多く見られる摂食方法です。体内での消化が不要なことから体の構造を簡素化できます。葉食性の昆虫に比べて腹内部に空洞が多く、糞が少量です。



幼虫

セトウチマイマイを
食べている成虫

2. 植物毒 (No.143参照)

植物は常に動物に食べられることが運命付けられています。植物が強い光を求めて陸上に生きようになったのは、5億1000万年前といわれています。昆虫が出現したのが4億8000万年前、は虫類は3億年前、哺乳類は2億年前といわれています。恐竜が6,600万年前に絶滅し、現在は動物では昆虫、陸上植物では花弁を持つ被子植物が繁栄する時代となっています。

全ての植物が動物に食べられない工夫をしてきました。その一つが毒を持つという手段です。人が食べる野菜は、品種改良でその毒性を弱くしたものです。大根は辛味のもの、芥子油配糖体(グルコシノレート)を作り、被食を防いでいます。ツツジの仲間は毒性が強く、アセビ(馬酔木)も神経毒を持ち、殺虫剤に使われました。強毒のワラビも動物は食べません。このため、放牧地ではワラビが繁茂しています。



アセビの花



アサギマダラ

ところが、植物のこのような努力にもかかわらず、平気で植物を食べ、その毒までも利用する昆虫が出てきたのです。アセビを食べるチョウや、ワラビを食べるガがいますし、渡りをするチョウであるアサギマダラのように体内に毒を貯めて鳥に食べられないようにしているものも多数います。昆虫は植物との付き合いが長い分、多様な関係を作り上げているのです。

(倉吉博物館専門委員 國本洗紀 2023)